

風疹 (ふうしん)

予防接種が進んできたため、風疹は最近はあまり見かけない病気になりました。

風疹で怖いのは、妊娠初期の女性がかぶると胎児の先天的な異常がおきるかもしれない点です。都会ではワクチンの接種率が下がり、また風疹の流行がおきるのではないかとも心配されています。

赤ちゃんを奇形から守るために、必ずワクチン接種を受けて下さい。



世界の
子どもに
ワクチンを
日本委員会

風疹の予防接種

風疹ウイルスは、胎児に対して大変に強い「毒性」を持っています。妊娠5か月までの女性がかぶると、未熟児、心臓奇形、難聴、白内障などの症状が高率でおきることが分かっています（妊娠1か月では12～60%、2か月12～82%、3か月8～50%、4か月2～18%、5か月0～13%）。

2回のワクチン接種を受けることで、風疹はほぼ確実に予防できますし、みんなが受ければ、流行をなくすことができます。

現在は麻疹・風疹混合ワクチンとして、生後1歳代と小学校入学前1年間（いわゆる「年長」）の2回の接種を行っています。お子さんのために必ず受けるようにして下さい。

また成人の方では免疫がない方もおられます。お子さんが予防接種を受ける時にいっしょに免疫検査を受けたり、予防接種受けるようにして下さい。





風疹とは

数年おきに流行します。うつってから2~3週間後に、赤くて小さな発疹が体中に出ます。熱は全く出ない子から3日間高熱が出る子までさまざまですが、いずれにしても3日で治ります。「三日ばしか」ともいわれますが、はしかとは違うので、「はしかにかかった」などとふれまわらないように、それを聞いた他の医者さんが混乱します。



治療

頭痛や関節痛、発熱がみられるときには熱さましや痛み止めを、かゆみが強いときはかゆみ止めを処方します。



こんなときは診察を

- ①ぐったりして元気がないとき。
- ②熱が3日以上続くとき。



家庭で気をつけること

熱がなくて元気でも、発疹が消えるまでは家の中にいてください。食事その他、いつもと同じ生活でかいません。

☆合併症で気をつくるもの

先天性風疹症候群：妊娠初期の女性がかかると、心臓、目、耳に異常をもった赤ちゃんが産まれることがあります（一口メモ参照）

血小板減少性紫斑病：出血しやすくなる血液の病気。風疹患者3000人に1人の割合

脳炎：風疹ウイルスが脳をあかし、けいれん、意識障害などを起こす。数千人に1人の割合

風疹の発疹（ほっしん）は、一つひとつがはっきりした、米粒から小豆（あずき）の大きさくらいの赤いものです。顔や首、胸やおなかといった体の中心に始まり、手足に広がっていきます。かゆみが強いこともあります。

リンパ節の腫れが強いのも特徴で、うしろ頭から首の横にかけてルイルイとしてきます。（これは痛くないので、本人も気づいていないことがあります。）

